

古仏語直説法半過去形について
—— ‘Lais de Marie de France’ の不規則例を基に ——

前 田 弘 隆

はじめに

本稿が対象とする12世紀の韻文作品“Lais”の校訂本の中で、J. Rychner氏は、この短詩集の作者Marieの直説法半過去形の使い方に些か突飛な(insolite)用例が散見されると指摘している。⁽¹⁾氏は、それらの例が作者の固有語法として複合過去形に対立するアスペクトを有したものであるかも知れないと示唆しているが、更に細微な考察が要るとして結論を控え、それらの半過去形の現われている詩行を挙げるに留めている。⁽²⁾

本稿は、氏の指摘している半過去形の不規則な例が、この時制形の用法の中で全く孤立したものであるのかどうかを検討しようとするものである。また、それらの例に見出される特徴が、この時制形の孕む表現上の価値を見直す契機となり得ないかを探ろうとするものである。⁽³⁾

1. 問題の所在・背景

Rychner氏が先づ着目するのは、次の詩行に現われた半過去形である。

1. G. 739-’ 40

Il la receit entre ses braz, / De sun bliaut trenche le laz;
La: einture voleit ouvrir, / Mes n'en poeit a chief venir. ⁽⁴⁾

(彼は、彼女を両腕に抱き、彼女の上着の結び紐を断つ。帯を開けようとしたが、思いを遂げることが出来なかった。)

これについて氏は、下線部半過去形に依って「表現された事行は物語の一連の中心的事行に属している」ので、「《 il voulut...mais n'en put venir à bout 》と解釈すべきであろう」⁽⁵⁾と考えている。

氏が問題としているのは、物語を語る時制形の選択、つまり、物語の地の文に於いて、筋を展開する出来事を描くのは、単純過去形であって半過去形ではないのではないかということの様に思われる。ここには古仏語に限らず、フランス語の過去時制に組み込まれた二時制形、単純過去形と半過去形、の機能分担に関する前提の尊重が見られる。そこで、この分担を、この作品の書かれた時代の言語事情も合わせ、以下で概観しておきたい。

単純過去形と半過去形とは、根本的に《 Perfectif 》：《 Imperfectif 》というアスペクトの対立を反映する言語形態である。したがって、話者の事行の把握の仕方に依って、これらの形態のいずれかが、発話に際し選択され得る。ところで、《 Imperfectif 》が “ would be more appropriate as a background statement to a discussion of the individual events ” (6) であることから、フランス語では半過去形が、単純過去形・複合過去形等の描写する出来事の為の背景的説明的陳述を受け持つと考えられている。つまり、単純過去形が「前景」を語る一方、半過去形はその「背景」を語るに留まるということである。(7)

この点を踏まえるならば、先の引用例に見られた半過去形の突飛さは、背景から前景に突出しているという印象に起因すると言えるだろう。また、別の面からもこの半過去形の突出が指摘出来る。

古仏語の初期段階では、これら二時制形の出現に明らかな偏向が見られた。半過去形がかなり抑制されていたのである。それは、この時制形の用法が確定していなかったからというのではない。

E por o fut presentede Maximien, / Chi rex eret a cels dis soure pagiens. (8)

(そして、そのせいで彼女はマクシミアヌスの前に立たされた。彼はその頃、異教徒らを治める王であった。)

Bons fut li secles al tens ancïenur, / Qeur feit i ert e justise ed amur;

S'i ert creance, dunt or n'i at nul prut. (9)

(古人の時代、この世の中は良かった。信義・正義そして愛があったから。

また信仰もあった。しかるに今は何もない。)

上段は、881年頃に書かれた最古のフランス語に属する資料に見られる例であり、下段は、1040年頃の文学作品としては最も古いものからの例であるが、ここに現われている半過去形は、その典型的用法に基付いていると考えられよう。

半過去形を抑制していたのは、他の時制形、特に単純過去形の多用に因るものであった。現代語であれば、その表現内容から当然半過去形が用いられるであろうと思われる、例えば人物の性格描写や事物の恒常的な存在等までも、単純過去形が表現していたのである。

De sun seigneur fu molt privez, / Chevaliers ert pruz e vaillant;

De sa moillier out deus enfanz,

(B. 32-'4)

(彼は、領主の腹心であって、勇ましく雄々しい騎士であった。妻に生ませた子が二人いた。)

cf. De sun seigneur esteit privez, / E de tuz ses veisins amez.

(B. 19-20)

したがって、単純過去形が半過去形の出現領域を侵食することはこの時代にあっては、云わば当然前のことと見做されるのだが、その逆は常態ではなかったと考えられているのである。

ところで、本稿で扱う作品が書かれた12世紀末、新しい文学形式 'roman' が登場し発展すると平行して、半過去形の使用も、その用法に沿った領域に於いて広まって行った。(10) とは云え、

単純過去形はすぐれて叙述の時制形として留まっていたので、13世紀に至り、半過去形の現われ方に現代語のそれと変わる所が無くなったとしても、まだ単純過去形の現われ方は優勢であったのである。(11)

II. “Lais”の構成⁽¹²⁾ 半過去形の用例分布

1. 作詩法と全体の構成

この作品は、八音綴平韻詩である。詩行二行毎に脚韻を踏む。(I. 初出引用例文参照。〽〽は平韻を成す)

全体の構成は、その総題が示す様に ‘Lai’ と呼ばれる短詩12編を本文とした詩集である。また、本文に、作者の創作意図及び献辞を認めた ‘Prologue’ が付されている。それぞれの詩は、各々独立したテーマのケルト風恋愛奇譚を扱っている。各短詩はまた、その詩で語られるエピソードの着想・典拠を解説する前言部分 (Prol.) と、語り終えた後にも結尾部分 (Epil.) とを備えている。‘Prologue’ 及び12編の短詩の行数は、(表I) の通りである。

(表I) 行数一覧

	Title	abr.	Prol.	Re (Disc.)	Epil.	Total
Prol. : 短詩前言部分	0 Prologue	Pr	56	- -	-	56
Ré : 短詩本文 (物語) 部分	1 Guigemar	G	26	856 (191)	4	886
	2 Equitan	Eq	12	294 (130)	8	314
	3 Fresne	Fr	2	512 (130)	4	518
(Disc.): 本文中の直説 話法に依る会 話部分	4 Bisclavret	B	14	300 (99)	4	318
	5 Lanval	Lv	4	640 (154)	(2)	646
	6 Deus Amanz	DA	6	244 (46)	4	254
Epil. : 短詩結尾部分	7 Yonec	Y	10	544 (128)	4	558
	8 Laüstic	Ls	6	150 (23)	4	160
※Prol. Epil. の() は、段落に依って、 本文と分明に分けら れていないことを示 す。	9 Milun	M	8	522 (160)	4	534
	10 Chaitivel	Cht	8	222 (58)	10	240
	11 Chievrefoil	Chv	(10)	96 (2)	12	118
	12 Bliduc	Bl	28	1152 (331)	4	1184
	Total		190	5532 (1452)	64	5786

2. “Lais”全体に於ける半過去形の分布。

A表は、作品全体に於ける用例数を示す。

(表Ⅱ)直説法半過去形の分布

A	Pr	G	Eq	Fr	B	Lv	DA	Y	Ls	M	Cht	Chv	El	Total
Prol. Prop. 1	1/4		1/		2/			1/					2/	7/4
Prop. 2 rel.	/3		/2											/5
nom.	/1													/1
Re. Prop. 1		46/7	7/5	18/8	13/6	31/7	10/4	25/3	14/6	22/4	19/19	4/2	48/2	257/107
Prop. 2 rel.		8/7	/2	3/10	2/	7/9	3/2	5/6	1/4	3/6	/3	1/7	10/6	43/62
nom.		4/5	2/	/2	1/5	1/4	/2	2/4	1/	2/3	1/1	/1	2/10	16/37
adv.		1/5	1/1	/4	1/	6/3	2/2	3/5	4/2	2/	/1	/2	4/2	24/27
Epil. Prop. 1														
Prop. 2 rel.												1/		1/
Total	9	83	21	45	29	68	25	54	32	52	44	18	111	(591) 348/243
B	A表○位置に於ける不規則例数													
Prop. 1		2/	1/		1/1	/1	2/	3/	1/	1/2	/1	1/2	5/3	17/10
Prop. 2 rel.							1/1							1/1
nom.												/1		/1
adv.			1/				/1					/1		1/2
Total		2	2		2	1	5	3	1	3	1	5	8	(33) 19/14

Prop. 1: 主節述語動詞として Prop. 2: 従節

rel. : 関係節 nom. : 名詞節 adv. : 副詞節

/ : /の分母は、詩行末に位置する例数を示す。

。 : Disc. 中に現われた例を含むことを示す。

・ : Disc. 中に現われ、仮定節を導くSiを伴う例を含むことを示す。

△ : Disc. 外に現われ、仮定節を導くSiを伴う例を含むことを示す。

○ : Rychner氏の指摘する不規則例を含む。

* Prol. Prop. 2 adv. Epil. Prop. 1, Prop. 2 nom. adv. 例ナシ。

B表は、A表○位置に於ける不規則例の例数を、出現位置毎に示したものである。

Ⅲ. 不規則例。分析。

表ⅡAの○位置に於ける不規則例を以下に挙げる。Rychner氏のコメントの在るものは、そのコメントも示す。(13)

1. G. 739-’40 (Prop. 1) II 初出引用例参照。

2. Eq. 48-’9 (Prop. 2, adv.; Prop. 1)

El chastel u la dame esteit / Se herberjat li reis la nuit;
Quant repeirout de sun deduit, / Asez poeit a li parler,
Sun curage e sun buen mustrer.

(その奥方のいる館に、その夜、王は泊まりました。王は、狩りから戻ると、十分奥方と語り合い、自分の心の内もまた望みも打ち明けることが出来ました。)

Com.: 「Equitan (王) が初めての晩狩りから戻ってしたことであって、(彼の) 習慣ではない。」 (14)

3. B.228 (Prop.1)

La femme Bisclavret le sot. / Avenantment s'appareilot;
El demain vait al rei parler, / Riche present li fait porter.

(Bisclavret [人狼] の妻はこのことを知りました。彼女は、上品に身仕度を致しました。
翌日、王の許に謁見しに行くのです。立派な献上物を届けさせるのです。)

4. B.232 (Prop.1)

Quant Bisclavret la veit venir, / Nuls hum nel poeit retenir :
Vers li curut cum enragiez.

(Bisclavretが彼女のやって来るのを見ると、誰にも、彼 [Bisclavret] を引き留めておくことが出来ませんでした。彼は、怒りに気も狂った様に彼女に跳び掛って行きました。)

5. Lv.584 (Prop.1)

Cil ki le chevalier amoent / A lui vienent, si li cuntouent
De la pucele ki veneit, / Si Deu plest, kil delivereit. (15)

(その騎士に友情を抱いた人々は、彼の所に行き、彼にやって来る娘のことを、もし神の御心に叶うならば、その娘が彼を救い出して呉れるだろうと語り聞かせました。)

6. DA.51-'3 (Prop.2 rel.; adv.; Prop.1)

Teus i ot ki tant s'esforçouent / Que en mi le munt la portoent ;
Ne poeient avant aler: / Iloec l'esteut laissier ester!

(力を振り絞って山の中腹まで、娘を抱いて運び上げた様な者もありましたが、それから先へは進めませんでした。そこで休みを取らなければなりませんでした。)

Com.: 「54行に単純過去形 'esteut' があるので、半過去形 's'esforçouent, portoent, poeient' を、習慣的あるいは反覆された事行を表わしているとは見られない; < s'e-forcèrent > と解すべきである。」 (16)

7. DA.167 (Prop.2 rel.)

Ses hummes mande e ses amis / E tuz ceuz k'il poeit avoir,
N'en i laissa nul remaneir.

(王は、家来らや友人達、そして、集められる限りあらゆる人々を、召し出し、誰も来ずに済ませていることは許しませんでした。)

Com.: 「《qu'il put》」⁽¹⁷⁾

8. DA. 219 (Prop. 1)

Lez lui se met en genuillus; / Sun beivre li voleit doner,
Mes il ne pout od li parler.

(娘は、若者の傍らに膝まづくと、若者にその水薬を与えようとしました。けれども、若者は、娘と口を利くことが出来ませんでした。)

Com.: 「《voulait》よりもむしろ《voulut》」⁽¹⁸⁾

9. Y. 172 (Prop. 1)

A tant la veille est repeirree; / La dame trovat esveilliee,
Dist li que tens est de lever: / Ses dras li voleit apporter.

(その時、老婆が引き返して来ました。老婆は、奥方が目覚めているのを見て、奥方に、起きる時間だと言いました。)

Com.: 「この半過去は間接自由話法であることを示しているかも知れないが、しかし」⁽¹⁹⁾

10. Y. 350 (Prop. 1)

Dunc guidot ele bien saveir / Que sis amis entrez i seit:
Dedenz se met a grant espleit. ⁽²⁰⁾

(そこで彼女は、自分の恋人がその中に入って行ったのか、しかと知ろうと心に決めて、大急ぎでその中に足を踏み入れました。)

Com.: 「《crut》」

11. Y. 490 (Prop. 1)

El demain vunt la messe oïr, / Puis s'en voleient departir.

(翌日、彼らはミサを聴きに行き、その後出発しようとしていました。)

Com.: 「《voulurent》か《vouldaient》か」⁽²¹⁾

12. Ls. 147 (Prop. 1)

Quant tut li ad dit e mustré / E il l'aveit bien escuté
De l'aventure esteit dolenz; / Mes ne fu pas vileins ne lenz.

(彼にすっかり言い、語り聞かせ、そして、彼もそれを聞いて了うと、そのことに心痛めました。けれども彼は卑しくもなく、グズグズもしませんでした。)

Com.: 「《fut》」⁽²²⁾

13. M. 118 (Prop. 1)

Quant ele sot ki il esteit, / A merveille le cheriseit.

(彼女は、その子の素性を知ると、驚く程その子を可愛がりました。)

Com.: 「《 se prit à le chérir 》」 (23)

14. M. 256 (Prop. 1)

Un brief escrit tel cum li plot, / Od un anel l'enseelot.

(彼女は、手紙一通思うままに書き、指輪と一緒に封をしました。)

Com.: 「《 le scella 》」 (24)

15. M. 468 (Prop. 1)

Quant Milun l'ot issi parler, / Il ne poeit plus escuter:

Avant sailli hastivement, / Par le pan del hauberc le prent.

(Milunは、若者がその様に話すのを聞くと、それ以上聞くことが出来ませんでした。)

急いで、前へ跳び出すと、その若者の鎖かたびら〔ヨロイ〕のすそをつかみます。)

Com.: 「《 put 》」 (25)

16. Cht. 188 (Prop. 1)

E il la prist a regarder; / Bien aparceit qu'ele pensot.

Avenaument l'areisunot:

(そして彼は、彼女を見つめ出しました。彼は、彼女が思い耽っているのだと気付きました。)

(それで) 彼は、彼女に向かって丁寧に話し掛けました。)

Com.: 「《 lui adressa la parole 》」 (26)

17. Chv. 31-'2 (Prop. 1 ; Prop. 2 adv.)

En la vespree s'en eisseit, / Quant tens de herbergier esteit.

18. Chv. 34-'6 (Prop. 1 ; Prop. 1 ; Prop. 2 nom.)

Od paï sanz, od povre gent, / Perneit la nuit herbergement;

Les noveles lur enquereit / Del rei cum il se cunteneit.

(日暮、宿に泊まる時間になると、彼〔Tristan〕は、そこ〔森〕を出ました。)

(彼は、野夫らや貧しい人々の所に夜、泊めてもらいました。〔そして〕彼らに、王がどうしているのか、消息を尋ねました。)

Com.: 「この条りの半過去形は、Tristan の習慣を描いているのではなく、これ文の個別的・瞬時的行為を描き出している: 《 il sortit, demanda des nouvelles … 》」 (27)

19. El. 43 (Prop. 1)

Pur l'envie del bien de lui, / Si cum avient sovent d'autrui,

Esteit a sun seignur medlez /-/ Que de la curt le cuncea

Sanz ceo qu'il ne l'areisuna.

(彼の厚遇をそねんで、というのも他の人々にはしばしばそんな気持ちが生じたのですが、)

彼は、王に対して中傷され、それで王は、彼を、訳も言わずに宮廷から追い出しました。)

Com.: 「《 il fut calomnié 》」 (28)

20. El. 104 (Prop. 1)

Eliduc en oï parler, / Ne voleit mes avant aler;

Quant iloc ad guere trovee, / Remaneir voelt en la cuntree.

(Eliducは、その話を聞くと、それより先に行こうとは思いませんでした。そこで、戦さに出喰わしたので、その国に留まろうと思ったのです。)

Com.: 「《 il ne voulut pas 》」 (29)

21. El. 406 (Prop. 1)

A cunseil li ad dit saluz / Que la pucele li mandot,

E l'anelet presentot; / La ceinture li ad donee.

(彼はこっそりと娘からの挨拶の言葉を伝え、騎士に指輪を贈りました。帯も騎士に贈りました。)

22. El. 456 (Prop. 1)

Quant ele oï qu'il remaneit, / Mut durement s'en esjoieit,

Mut esteit liee del sujur; / Ne sot nient de la dolor

U il esteit puis qu'il la vit. (30)

(彼がその地に留まると聞くと、娘は、それを大変喜びました。彼の逗留をととても嬉しがりました。娘は、彼が娘に会って以来、身をやつしている苦悩のことは、一寸も知りませんでした。)

23. El. 1044 (Prop. 1)

Quant ne la pot fere lever, / Semblant feseit de doel mener.

(私たちは、伴れを起こすことが出来ないので、悲しみに暮れた素振りを見せました。)

24. El. 1062 (Prop. 1)

La dame lieve, si le prent, / Ariere va hastivement,

Delenz la buche a la pucele / Meteit la flur ki tant fu bele.

(奥方は立ち上がり、それ〔花〕を掴み、急いで引き返し、娘の口の中に大変美しい花を入れました。)

Com.: 「この条り(1032~1064)の半過去形(及び大過去形)は、殊に人目を引くものがある。」 (31)

25. El. 1070 (Prop. 1)

Demande li ki ele esteit, / E la meschine li diseit:

(奥方は、娘の素性を尋ねますと、娘は奥方に言いました。)

26. El.1096 (Prop.1, Disc.)

Pur la dolor que il menot, / Saveir voleie u il alot;

Après lui vinc, si vus trovai.

(私は、夫が苦しんでいる苦惱故に、夫が何処へ行くのか知りたいと思っておりました。

夫の後を追って来て、あなたを見つけたのです。)

Com.: 「《 je voulais 》かあるいは《 je voulus 》か」⁽³²⁾

分 析

表ⅡA,Bですで見たと同じ様に、不規則例は Prop.1 に位置するものが多い。上記の文単位で示せば、例文7を除いた残り全てに見出される。これらは、例文1について氏が明らかにしていた様に、物語の筋を展開する中心的事行を描き出したものと見做され得る。例文3, 5, 8, 13等は、この点顕著である。また、例文2のコメントに見られる氏の判断は、疑うべくもない。そこで、これらの半過去形は、単純過去形との関係に齟齬を来すと考えられ、Rychner氏が例文1や例文7, 8, 9等について、単純過去形に依って解釈すべきではないかとしているのも首肯される。

しかし逆に、これらの半過去形は、単純過去形では伝えられない表現価値を帯びているのではないかという可能性がある。事実、Rychner氏は、複合過去形との対比からその価値を想定していた。それは、複合過去形の《 Perfectif⁽³³⁾, Rétrospectif 》なアスペクトに対して、この時制形は《 Inchoatif, prospectif 》ではないかというものである。勿論、はじめに述べた様に氏は結論を避けているのだが、例文1 'La ceinture voleit ovrir',あるいは例文13 'A merveille le cheriseit'には妥当する様にも思われる。けれども、半過去形本来の《 Imperfectif 》と《 Inchatif, Prospectif 》とが折り合うものであるかは、疑問が残ろう。⁽³⁴⁾

また、例文1について考え直してみれば、'n'en poeit a chief venir'は《 Inchoatif 》では説明出来ない。むしろ、過去時制に於ける 'peeir'は《 Terminatif 》的⁽³⁵⁾だと考えられる。'voleit ovrir'が《 Inchoatif, Prospectif 》であると感じられるとすれば、それは 'voleir'の語義に因るのであろう。したがって、その表現価値を求める為には、別の観点から上記の例を検討しなければならない。

先づ、出来る限り用例を吟味しておきたい。

不思議に思われるのは、半過去形がそのアスペクトや時制価値よりも、あるいは、その価値と同時に、具体的形態を重視されて使用されていると思われる点が見られるにも拘わらず、氏がその点に触れていないことである。その形態重視とは、詩行末に位置し脚韻を形成している例である。作詩法が必ずしも文法を損なってまでその韻律上の整合性を第一に主張すると考えるのは誤りであろうが、了解可能な範囲で語形選択に影響を及ぼすことは明らかである。⁽³⁶⁾ この点から該当例を見てみたい。

表ⅡBから該当例は14例あることが分るが、これらの例文は、例文3, 5, 6, 13, 16, 17, 18, 21, 22, 25に含まれており、その脚韻を形成する語形の対応は次の通りである。

- | | |
|--|---|
| (3) <u>sot</u> - * <u>s'appareilot</u> | (5) <u>amoent</u> - * <u>cuntouent</u> |
| (6) * <u>s'esforçouent</u> - * <u>portoent</u> | (13) <u>esteit</u> - * <u>cheriseit</u> |
| (14) <u>plot</u> - * <u>enseelot</u> | (16) <u>pensot</u> - * <u>areisunot</u> |
| (17) * <u>eisseit</u> - * <u>esteit</u> | (18) * <u>enquereit</u> - * <u>cunteneit</u> (37) |
| (21) <u>mandot</u> - * <u>presentot</u> | (22) <u>remaneit</u> - * <u>s'esjoieit</u> |
| (25) <u>esteit</u> - * <u>diseit</u> | |

これらの対応では、(6), (17), (18)を除きいずれも後続韻の位置での半過去形が問題とされている(*印)。そこで、先行韻に位置した語形がこれらの半過去形の出現の引き鉄になっていると考えられよう。(3), (14)の先行語形は、単純過去形であるが、これらと平韻を組み得るのは、'-ot'語尾に依る半過去形しかない(cf. s'appareilot, enseelot)。一方、(5)(13)(16)(20)(21)(22)(25)では、先行語形自体がProp. 2に位置した半過去形であり、典型的な用法に依るものである。したがって、作者が後続韻の位置に動詞を配すること自体を考え直さない限り、半過去形の出現は決定的となる。

また、Prop. 2に位置していることを考慮すれば(6)(18)の's'esforçouent, cunteneit' (37)の出現も一応説明がつく。とすれば自ずと'portoent, enquereit'の出現も納得出来るかも知れない。

しかし少なくとも、(3)(5)(13)(14)(16)(21)(22)(25)の各例については、これらの半過去形の出現を作詩法上の理由に帰することが出来よう。

ところで、行末に位置しない例については、語形を理由にその出現を説明する訳にはいかない。語形の拘束が無ければ、その選択は自由となるからである。そして、自由であればこそ、そこに、他の時制形では表わすことの出来ない半過去形固有の価値が際立つことになり、また、その際立ちを利用することこそが、唐突さを押してもこの時制形を用いた根拠となった筈だからである。

先づ、例文1, 8, 26を見てみたい。これらは共に'veleir'が半過去形となっているが、ここに共通のニュアンスを感得することが出来ないであろうか。それは、単に行為の遂行を望んだというのではなく、「何とかしても、どうあっても」それを行おうという遂行に伴う行為者の感情、行為への思い入れ、執着の存在である。例えば1では、ある婦人の愛を得たいと乞い願う男が、「私は、この帯を切らずに結び目を解き開く人の外には誰も愛さない」と言い返された場面に続く部分に現われた文である。2では、飲めば直ちに体力を回復するという水薬を用意しながら、それを飲まず力尽き倒れ伏した恋人に、娘がその水薬を飲ませ息を吹き返そうとする場面である。26は、数少ない会話中の例であるが、永年別れて過ごした後、ようやく再会した奥方が、夫の苦悩や人知れず森の礼拝堂へ毎日出掛けて行くのに不信を抱き、その理由を突き止めようとした自分の行動を語

る場面である。これらの人物の行動は、「開けようとしたが出来ませんでした」「飲ませようとしてしました」「夫の行き先を知りたかったのです」という淡白な、表情の無いものではなかったであろう。「何とか開けようとしたがどうしても出来ませんでした」「何とかして飲ませようとしてしました」「どうあっても夫の行き先を知りたかったのです」という様に、その行為・行動に執着が在ったに違いない。単純過去形ならば、単に、過去に実現した出来事やそれが招来した結果を提示するに過ぎないが、半過去形は、この情景を生き生きと描き出しているであろう。

ここで半過去形が、事行の持続、例えば男が帯を開けようと思い、それに着手し、試行錯誤するその具体的時間の幅を反映しているとも考えられるが、それは直接的な重要性を有するものではないだろう。例文24は、‘Dedenz la buche - / Meteit la flur’であるが、「花を口に入れる」とは、入れた瞬間に実現しそれと同時に終止する行為であろう。したがって、この例の半過去形は、行為の持続時間を反映したものではない。勿論、習慣や反覆を表わしたものでもない。それにも拘わらずこの時制形が用いられているのは、‘mettre la flur’という行為が、半過去形の根本的アスペクト《Imperfectif》に依って把握されており、この把握の仕方が、我々に（あるいは当時の聴衆・読者に）この行為の遂行に際しその場に立ち合っているという印象を喚起しているのである。この例文の主語である婦人は、従者に殺させた鵜が、伴れの鵜の喰わえて来た花を口の中に入れられ生き返るのを目の当りにしたのだが、その花を自分の前に息絶え横たわる娘の口に入れる。ここで我々は、‘meteit’という半過去形で描写された情景に立ち合い、この婦人の、鵜が生き返ったのであるから同じ様にしたらこの娘も息を吹き返さないかと期待し不安に思う表情すら読み取ることが可能となるのである。この婦人と花の効力を知っている鵜との対比を次の文との対比から見る事が出来るであろう。‘De la chapele esteit eissue, / As herbes est el bois venue, / Od ses denz ad prise une flur / Tute de vermeille color, / Hastivement reveit ariere; / Dedenz la buche en teu maniere / A sa compaine l’avait mise / Que li vadlez avait ocise, / En es l’ure fu revescue. (El. 1045-’53)’⁽³⁸⁾ここでは、「生き返った(fu revescue)」が語りのテーマであり、‘avait mise’はそれに先立つ事実として示されているに過ぎない。

この様に過去の出来事を生き生きと描き出す、半過去形の根本的アスペクトに立ち帰った用法を考慮してみると、例文4の‘Nuls hum nel poeit retenir’は、例文1の‘n’en poeit a chief venir’について見たと同様の表現性が見出されよう。単に‘Bisclavret’を押し留められなかった事実のみを語っているのではなく、走り出そうと身を揉む気配に宥めたり諫めたりする様を彷彿とさせているのではなかろうか。また、Rychner氏が習慣的・反覆的行為ではないとコメントしていた例文6についても、力を振り絞り疲れ、娘の重さに耐えながら、しかし前へ一歩も進めなくなった困憊の様を目で見る如く想起させる。ただし、その努力もあっさり結末を迎えたものとして単純過去形で報告されているのである。

例文9, 17, 18はまた別の説明が可能かと思われるが、⁽³⁹⁾ 例文2, 10, 11, 12, 15, 19, 20,

23については、同様の半過去形の表現性を見出すことが出来るであろう。また、先に作詩法上の理由からその出現が決定されていると判断した例を見直すことも出来る様に思われる。例文3は、王に謁見する為に粗相の無いようにと念入りに身仕度の準備をする様が、例文5では、自分の無実を明らかにする為に、召喚したくともその手立てが無く、絶望しながら唯一の証人を待つ騎士に、好意溢れる面ちで口々に語り聴かせる人々の様が、そこに現われた半過去形から感得出来るであろう。

むすびに

単純過去形と半過去形との機能の違いに因り、前者が物語の前景に於いて筋の中心的事行を描き出し、後者が、その背景説明を受け持つという二分法から解釈し難い例の検討を通じ、半過去形が前景に位置し、単純過去形では得られない表現価値を帯びて用いられる場合があったと考えられるのではないかという点を見て来た。これは、半過去形の本質が‘*lebhaftes vorstellung*’であるとする E. Lerch の立場を受け、川本茂雄氏が古仏語では、「過去の動作・状態について単に constater する場合には」単純過去形を用い、「これを生き生きと意識にのぼせる時には」(40)半過去形を用いていたと述べていることと軌を一にする。この両者の使い分けは、話者の語りの態度の違いに帰することが出来るのだが、それはまた、古仏語に於ける《Perfectif》:《Imperfectif》の対立に立ち返る。つまり、過去に実現した事行を持続的・不完了的観点から眺める半過去形の根本的アスペクトの中に表現性を孕む可能性が介在したということである。

12世紀末 ‘roman’ の発展と共に半過去形の使用が拡大した。その背後には、この対立に基付く文学表現上の効果を目指したものが無かったであろうか。半過去形の価値は微妙で捉え難いとされるが、更にこの時代の作品に見出される用例の検討を、この点からも進めて行かなければならない。

注

- (1) J. Rychner, ‘Les Lais de Marie de France’, CFMA, Champion, 1981. P. 245
- (2) 上掲書 P. 245 Rychner氏は、更にこの作品に於ける大過去形についても言及している。半過去形との関連から考察出来る問題を含んでいると思われるが、本稿では触れない。
- (3) 本稿は、単一作品の不規則と見做された例のみを対象としているので、古仏語全般に亘る見解を直ちに提出することは望むべくもない。筆者は、本稿を今後の包括的な古仏語の動詞時制形体系研究の一環として位置付けている。
- (4) 用例引用は、テキストの二行を、一行に並記してある。/ は、行の終わりを示す。行数は該當時制形（下線部）の箇處を指示している。
- (5) 上掲書 P. 245
- (6) B. Comrie, (1981) P. 17
- (7) H. Weinrich, (1982) P. 203以後

- (8) ' 《 Séquence 》 de sainte Eulalie ', A. Henry, (1978) P. 3
- (9) ' La Vie de saint Alexis ', Ed. by C. Storey, Blackwell, 1968. (1-3)
- (10) Ph. Ménard (1976) P. 139, G. Moignet (1973) P. 256 参照
- (11) L. Foulet (1977) P. 221 参照
- (12) 作者 Marie de Franceは、ノルマンディ生れの女性であるが、具体的に誰であったかははっきりしない。英国に渡り、彼の地で当作品 ' Fables ' ' Espurgatoire saint Patrice ' を物した。' Lais ' は1189年以前、' Espurgatoire ' は1189年以後、' Fables ' はその間に書かれたとされている。' Fable ' は英語から、' Espurgatoire ' はラテン語からフランス語 (Anglo-normand 方言) への翻訳。' Lais ' の写本は五種。H, S, P, C, Q。Rychner 氏の校訂本は、H を基にしている。
- (13) 以下の各例 (下線部) は、G. 739-' 40 (例文 1) のNote参照の指示がある。
- (14) 上掲書 P. 248 < reperoit > とする写本 (S)。 (例文下線部に該当する variante が、他の写本に見られる場合、ここに記す。)
- (15) < veneient > とする写本 (H, S, C) < vindrent > (P)
- (16) 上掲書 P. 263 < s'esforcierent > (s)
- (17) 上掲書 P. 264 < que il pot > (s)
- (18) 上掲書 P. 264
- (19) 上掲書 P. 266
- (20) < Dont cuide ele bien que soit > (s)
- (21) 上掲書 P. 267
- (22) 上掲書 P. 269
- (23) 上掲書 P. 270
- (24) 上掲書 P. 271 < O son anel le seelot > (s)
- (25) 上掲書 P. 272 < Il ne le pot > (s)
- (26) 上掲書 P. 275
- (27) 上掲書 P. 276 < en l'avesprant s'en est issu que tens de herbergement fu > (s)
< comment se > (s) 当該例については、' Les noveles ' が複数形であることから、Rychner 氏のコメントとは逆に、習慣的・反覆的であるという可能性も強いと思われるが。
ちなみに ' la novele ' が単数形で、DA47, 127; M. 334; El. 253, 571, 783に現われている。
E. A. Francis 氏が Rychner氏とは別の解釈をするとの事であるが、本稿執筆段階では未見。
- (28) 上掲書 P. 281
- (29) 上掲書 P. 282
- (30) 上掲書 P. 282 < s'esjoïsseit > (éd. par Cohn)

- (31) 上掲書 P.288
- (32) 上掲書 P.288
- (33) これは、《 Parfait 》とすべきであろう
- (34) 過去時制に於いて、状態動詞の《 Parfectif 》が《 Inchoatif 》となることについては、Comrie (1981) P.19, Lyons (1977) P.713 参照
- (35) ' a chief venir ' の意味内容からではない。cf. Il a pu (put, pouvait) faire (la chaise)
- (36) Weinrich (1982) P.357 以後参照。「『ロランの歌』やフランス中世のテキストで、時制が韻を踏むために決められていることが多いのは疑いのないことである。」(P.359)
- (37) Rychner 氏の注では ' se cunteneit ' も不規則と認めているのかどうか、はっきりしないのだが、この半過去形は、その典型的用法に則していると考えられる。
- (38) 「(鼈は)礼拝堂から外へ出ると、森の藁草の所へ行き、一本の真紅の花を齒で摘んだ。すぐ引き返す。従者に殺された伴れの鼈の口の中にそれを入れると、立ち所にその鼈は生き返った。」
- (39) 例文9は、自由間接話法であろうかという指摘が妥当と思われる。また、例文17, 18は注(27)参照。
- (40) 川本茂雄 (1985) P.146 川本氏は次の例を ' La Conquête de Constantinople ' (Villlehardouin) から採って、この半過去形の現われ方を示している。
' Molt s'accorderent il Venisien que... toz li assaus fust par devers la mer. Li François disoient que il ne savoient mie si bien aidier sor mer com il savoient par terre. ' (ヴェネチア人達は、海から総攻撃すべきだと衆議一決した。フランス人達は、自分らは陸上で支援出来る様には海上ではうまく支援出来ないと言った。)

参考文献

- J.S.Armbruster, ' Temporal Perspective in Old French Narration : Estre in Past Tense Functions ', Romance Philology, vol.34, No.4, 1981
- E.Benveniste, ' Les relations de temps dans le verbe francais ', Problèmes de Linguistique générale I, Gallimard, 1966
- B.Comrie, ' Aspect ', Cambridge Univ. Press, 1981
- L.Foulet, ' Petite Syntaxe de l'ancien français ', CFMA, Champion 1977
- H.B.Garey, ' Verbal aspect in French ', Language, Vol.33, No.1, 1957
- M.Harris, ' The ' Past simple ' and the ' Present Perfect ' in Romance ', Studies in the Romance Verb, ed. by N.Vincent & M.Harris, Croom Helm, 1982

- A. Henry, 'Chr stomathie de Litt rature en Ancien Fran ais', A. Francke, 1978
- P. Imbs, 'L'Emploi des Temps Verbaux en Fran ais Moderne', Klincksieck, 1960
- S. 川本, 「言語の構造－フランス語そのほか－」白水社, 1985
- J. Lyons, 'Semantics 2', Cambridge Univ. Press, 1977
- Ph. M nard, '1. Syntaxe de l'ancien fran ais', Manuel du fran ais du Moyen Age, SOBODI, 1976
- G. Moignet, 'Grammaire de l'ancien fran ais', Klincksieck, 1976
- H. G. Schogt, 'L'aspect verbal en fran ais et l' limination du pass  simple', Word, Vol. 20, 1964
- H. Weinrich, 「時制論」, 紀伊國屋書店, 1982
- M. Wilmet, 'Etudes de Morpho-syntaxe verbale', Klincksieck, 1976